

我流子育て支援論

(10)

～ 発達障がい ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

「発達障がい」という言葉が最初に使われるようになったのは、1961年のアメリカで、当時の大統領ケネディーによって作られた「精神遅滞に関する会議」においてである。

その後、日本で一般的に使われるようになったのは、ここ20年くらいのものであろう。

精神障がいについては、統合失調症(当時は分裂病)やうつ病など、一般的に知られていたし、知的障がい(精神発達遅滞)についても、特殊学級も社会的に受け入れられていた。しかし発達障がいと言う考え方は最近のものである。

筆者が学生時代、「自閉症」は後天的な病気として認識されており、その治療場面を見学に行った事がある。世界でも一時は母原病とまで言われていた。しかし、ここ30年ほどの間に、自閉症は発達障がいとしての地位を確立し、様々な広が

りをみせている。自閉症も高機能、中機能、低機能と別れたり、自閉症スペクトラムという言葉も含め様々な言葉が生まれた。アスペルガー症候群或いは広汎性発達障がいも同様である。

そのような中、アスペルガー症候群や広汎性発達障がいは、違う意味で有名になった。レッサーパンダ事件(広汎性発達障害)、豊川市主婦殺人事件(アスペルガー症候群)、長崎男児殺人事件(アスペルガー症候群)など、世間で何か特異な事件が起きた時に、発達障がいの診断名がマスコミで取りざたされることが増え、知名度が上がってしまったのだ。その結果、ネットで保護者が調べ、自分の子がアスペルガーではないかと疑うようになったのである。

アスペルガー症候群と子どもが診断されたことで、将来事件を起こすのではないかと相談に来る保護者もいるくらい、

犯罪と発達障がい結び付けられているように見える。しかし、発達障がい犯罪の原因になるわけではない。このことから、報道機関に対して日本発達障害ネットワークは次のような要請を出している。

1. 発達障害の診断を受けていた場合でも、本人の状況に配慮し、本人への告知をしていない場合が少なくありません。当事者自身も正しく説明を受けていない場合には、診断名を公表することは、差し控えていただくこと。
2. 事件と発達障害の因果関係が司法精神医学的に解明されていない段階においては、注釈の有無を問わず、障害名を報道することは控えていただくこと。
特に、初報では原則として、障害名に触れないこと。
3. 報道機関として、日頃から、発達障害に関する正しい情報を報道するようご尽力いただくこと。(原文転載)

こうした要請を出しても、どこまで報道機関が正しい情報報道をしてくれるかは分からない。臨床心理士会でも、子ども絡みの事件が起きた時、子どもたちへのインタビューは事件等の再体験になり、予後悪化させる可能性があることから、避けて欲しいと要望を出しているが、いまだに子どもたちに直接マイクを向け、インタビューが報道されているところを見ると、こうした要請・要望は無視されるのかもしれない。視聴率や話題性ばかりを追求する側としては、そんな要請に等応えられないのだろう。こんなことでは益々発達障がいの悪い意味での知名度が上がってしまう。

注地欠陥多動性症候群（ADHD）という言葉も一般的になり、ちょっと落ち着きがないと「うちの子 ADHD じゃないかと思って」と相談に来る保護者も増えた。刑務所や少年院に ADHD と診断された人がいると報道されると、一部であっても『皆』とか『多くが』ADHD であるかのような誤解を招く。

一方、発達障がいの状態像についての本も書店でたくさん見かけるし、ネットでも情報を得られるようになった。

ネットで流れている情報や本に載っている情報が間違っているわけではないが、アスペルガーや ADHD の症状の一部は、子ども達に多くみられる様相であるにもかかわらず、障がいを決定するとみられてしまうことに問題がある。子育て中の母親にしてみれば、「普通」の基準が分からない事が多い。そのような中、発達障がいの話を聞けば、ちょっとした様子に「発達障がいではないか」と不安になっても仕方がない。情報が多すぎることの弊害でもある。知らなければ悩まずにすむと言う事は多々ある。

そもそも、健常と障がいの線引きはどうなっているのか？

古くから知られている精神発達遅滞一つをとっても、概ね IQ70 以下（75 以下ということもある）という一応の目安はあるものの、では、71 なら精神発達遅滞ではないと言えるのだろうか？境界知能という言葉があり、71～85 までがそれにあたる。それだけの幅を設けているのには、やはり 71 であっても、80 であっても知能としては学校で勉強に付いていく上で大変なところがあるから

であろう。では86、87であれば、大丈夫かと言えば、そうとも言えないのである。

知能検査自体、子どもの体調や気分によっても違いが生じるものであり、数値に置き換えているとはいえ、血液検査結果のように割り切れるものではない。

一つの目安として検査を行っているが検査だけではなく、観察によるところも大きく、ということは、そこに人が介入する以上、人が左右するところもあると言う事である。

しかし、療育手帳の判定などは、知能検査を基準に決定して行かねばならない。手帳に該当するか否かについては一応の基準はあるものの、諸事情を勘案して決めることもある。即ちIQが70(75)以下ばかりではないと言う事になる。

最近ではアスペルガー症候群など、IQは100近くあっても、手帳該当になることもあるようだ。子どもの社会性の問題が大きくあり、IQは高くても社会には適応しにくく、生活上の様々な困難を抱えていると言う事が考慮されるからである。

つまり、ここからが健常、ここからは障がいという線引きは、はっきりとは引けないのである。だからこそ、教育現場や保育現場では、先生方や保育士、幼稚園教諭などが、苦勞するのだ。診断が出てしまえば、特別支援教育や障がい児保育など、加配やTT等の資源を使えるが、診断が無い場合は中々資源を使えないのが現状だからだ。

学校等でよく、「最近発達障がいの子どもが増えた」と言われるが本当にそうなのか？発症率があがっているのか？もちろん、発達障がいについてみる目が肥え

たし、軽度でも拾いやすくなったから増えたとも言えよう。他にも医療の発達とともに、昔であれば育たなかった子どもたちが育つ中で、障がいを持ってしまう子どもが増えたと言えるかもしれない。被虐待による発達障がいと言われるものも増えた。となると総合的には発達障がいは増えていると言えるのかもしれない。しかし彼らの生きにくさは昔より強くなっていると思う。

昔から発達障がいの子どもはいたわけで、今ほど区別されてはいなかった。小学校であれば、勉強の出来る子、出来ない子、スポーツが得意な子、不得手な子、音楽や絵が得意な子、不得手な子、色々な子が居て当たり前だった。もちろん子どもは残酷なので、下手な絵を笑ったり、吃音がある子や太っている子をからかったりということはあったが、その一方で、運動が得意な子は体育で注目され、勉強が得意な子は運動が出来なくても問題なかった。皆がそれほど豊かではなかった時代は、持ち物についてもとやかく言われることもなく、風呂に毎日入って居なくてもそれが普通だった。

しかし、今は人と違うことが受け入れられにくくなっているように見える。お風呂は毎日入る子が殆どで、2-3日に一度という家は圧倒的に少ない。毎日入らない子の場合、夏は髪の毛がべたついたりして、不潔だと言われてしまうこともある。

又、発達障がいのある子が書道の時間に筆先を友達のシャツやズボンにつけてしまうことは多々ある。白いシャツに墨をつけ、弁償させられた子を知っている。学校は汚れても良い恰好で行けば良い。

校庭で遊んだりできる服装と言えば、汚れても良い服装ではないのか？学校におしゃれをして登校する意味は何なのか？真っ白なズボンやひらひらスカートは学校という場に相応しいのだろうか？長い髪の毛を結わいていない子も多い。中には金髪に染めている子もいる。小学校では服装が自由なところが多いが、何かおかしいと思っているのは筆者だけか？こうしたことが、発達障がいを持つ子の（故意ではない）問題行動を増やしていると言えないか？

また、教室で見ていると、鉛筆や消しゴムなどの落し物がとても多い。しかも落とし主が見つからないのである。ADHDの子では落し物が多いのは仕方がない。しかし、発達障がいの無い子どもたちも、物を落とし、探そうとしない。又買えばいいと思っているようだ。授業中、鉛筆や消しゴムが落ちるのは当たり前。テストをやっているのにテスト用紙が落ちる、教科書やノートが落ちる、机の三隅にストッパー様の土手を作らないといけなのではと思うくらいである。ただ、物を落とす子どもたちが皆 ADHD ということはない。

物に拘る発達障がいの子もが、同じ鉛筆を豆粒のように短くなるまで使ったり、消しゴムのかすを集めたり、シャープペンシルの芯の空ケースを積んだりは許されないのだろうか？いつもいつも同じマリオやポケモンの絵を描いたり、車の話や飛行機の極めて専門的な話を一方的に話したり、指のささくれをむしって血だらけになっていても、いいではないか。誰に迷惑をかけるのか？強いて言え

ば長い話はちょっと迷惑かもしれないが・・・。

空気が読めない、言語でのやり取りに齟齬が生じる、そんなことが発達障がいの子どもたちを追いつめている。日本では主語が省略されることが多く、英語より分かり辛い。しかし、周囲の人間には「分からないと言う事」が分からない。「それとって」って『それ』って何？、「後は適当にやっておいて」「『適当』って？」具体的ではない指示に、子どもたちは逡巡し、自分なりの結論に従って行動し、叱責される。深読みしすぎの事も多い。

「前に言ったでしょ。なんで同じことを繰り返すの？」と言われても、「前に言われたこと」と今回の事は同じではないのである。「1を聞いて10を知れ」と言われても、「1は1」でしかなく、1と1'はイコールではない。

どんな子も受け入れられるところの広さと豊かさを大人や子ども達が持てれば、発達障がいのある子ども達は平和に集団生活を送る事が出来、保護者も安心だろう。しかし、今の社会には、人と違う事を認めない心の狭さ、貧困さがある。そのため、発達障がいを持った子ども達は昔よりも生き辛いのである。

最近高校生が、ちょっと変わった子を「ガイジ」と表現する。「障害児」という意味である。嫌な差別用語である。人と違う事がそんなに悪いことか？

過去を紐解いてみると、世の中の技術や文化の発展の陰には、多くの発達障が

い者の成果があったと思う。例えばダビンチ、アインシュタイン、エジソン、チャプリン、ピカソ、ダリ、岡本太郎、ビル・ゲイツなど。現在でも、映画俳優のトム・クルーズの学習障害は周知のことだが、他にも作家、芸術家など、診断はされていないものの発達障がい疑われる人は多い。人とは違った感覚、発想、見え方が発見や発展、芸術に寄与することは多いのだ。天才といわれた人たちは今で言えば発達障がいだったのではないか？結果を残す事が出来たために、奇異な行動があっても良しとされていただけかもしれない。そこには社会のおだやかさ、心の広さもあったと思う。

引きこもり青年の相談を受けていると、アスペルガーや高機能自閉など発達障がいの問題が度々みられる。小学校、中学校、高校と、ずっといじめにあい、しかも保護者が子どもの発達障がいに気付いていなかったために、二次障害を起こしていることもある。沢山のトラウマを抱えた青年は、鬱や強迫性障害などを発症している。その結果として自殺企図も多くみられる。3万人を超える自殺者の中には、このような青年も数多く存在すると思う。

周囲が本人の発達障がいを認識し、適切な対応をしていれば、本来素直で真面目な彼ら（ちょっと素直過ぎで真面目過ぎだが・・・）なので、二次障害を起こすことなく、真っ直ぐ育ち、得意な処を伸ばして自信を持って生きていくことができただろうと思う。人への不信感と、失った自信を回復するにはとても長い時間と膨大なエネルギーがいるのである。

我々子育て支援に関わる者たちは、子どもたちの様子をよく見て、発達障がいの有無に気付き、診断を受けるか受けないかより、まずはそうした子どもたちがいじめや虐待の被害者にならないように十二分に気を配らねばならないと思う。特にいじめでは、表情に出さなかったり、加害者が「冗談だよ」と言ったらそれで納得してしまうところがあるため、要注意である。

筆者は子どもたちがいじめについての講演をするとき、ドラえもんの話を出す。

ドラえもんは本来は黄色の猫型ロボットで、量産型なのでどれも同じ形であった。しかし、ネズミに耳をかじられ、耳が無くなった自分の姿を見て色は真っ青に変わり、猫型とは思えない形のロボットになったのである。（最近ドラえもんが青い理由についての話が変わったようだがそれについてはここでは述べない。）しかも、ドラミちゃんとは同じオイルを使っている兄妹で、古いオイルだったために上澄みの薄い部分と下の方に養分の溜まった濃い部分が出来、上澄みを使ったのがドラえもん、下の濃い部分を使ったのがドラミちゃんだったため、ドラえもんは妹より出来の悪いロボットになったのだ。

もしドラえもんがドラミちゃんと同じ黄色の猫型ロボットで、優秀だったら、そしてのび太君が勉強のできる、出木杉君のような子だったら、ドラえもんの話は成り立たない。

人と違う自分、勉強は出来ないが、綾取りが得意で心の優しいのび太君、胡麻

すりで嫌味で調子の良いお金持ちのスネ夫君、乱暴で音痴で意地悪なジャイアン君、そんな子どもたちの組み合わせが、学校の日常を描いている。生みの親の藤子不二雄両氏が意図したことが何かは別としても、ドラえもんの話は、子どもたちには伝わりやすい。色々な子が居るから、力を合わせた時にバランスよく纏まる。みんながみんな同じであれば、ただのロボットで、個性も何もないし、識別も出来ない。どんな人も認め、受け入れられる心の広い人間になってほしい。そんなメッセージを込めて、講演をしている。

中高生向けでは、枠組みの話をする。人それぞれが枠組みを持っていて、その枠組みを通して物事や言葉を理解しており、枠組みが小さいと、自分の枠組みに一致しない内容を受け入れられないと言う話をする。例えば「『夏の花』と言えは？」と質問すると、殆どの子どもたちが「ひまわり」と答える。しかし、ひまわりは必ずしも夏の花ではない。アラビア半島など砂漠の国では冬に花が咲く。そんなことを話すと、子どもたちはびっくりする。また、ひまわり以外の花を思い浮かべる子どもも何人かいるので、その様子を見て、「人それぞれ」に改めて気付くのである。つまり、どんな人も受け入れられる、大きな枠組みを持つこと、発達障がいのある子どもたちは皆とは違うが、そういう子どもがいても良いのだと言う事に気付いてもらいたくて枠組みの話をしているのである。

「鉄は熱いうちに打て」ということわ

ざのように、子どものうちから、他人をありのまま認め、自分をありのまま認められる子どもに育てていけば、発達障がいの問題は今のよう大きな問題にはならないだろう。

親への関わりも同じである。親が自分の子を自分の枠組みでがんじがらめにしているのは、子どもは自尊感情を育てられない。特に発達障がいの子どもでは親の奴隷となり下がるか、攻撃的になるかのどちらかになるだろう。我が子をありのまま受け止められる親にして行ければ、不幸な結果にはならないだろう。

知識を詰めただけの、子どもばかりを増産しても日本の未来はない。当たり前と思うようなことにも、「何故」「どうして」「不思議」と思う事、「こうしたらどうなる？」「あんなやり方はどうか？」そうした発想の豊かさは、今の時代発達障がいのある子どもにしか無いのかも思ってしまうほど、最近の子どもたちは教科書通りだ。

融通が利かないという面は「実直さ」に、集団に馴染まないところは「発想の豊かさ」に、言語でのやり取りの難しさは「視覚的情報によるやり取りの得意さ」に変換して行こう。

発達障がいのある子、発達障がい疑われる子に対しては、悪い所を探して治そうとするのではなく、良いところを伸ばす支援をして、自信を無くさないように、信頼できる人間関係を作って行ってほしい。

そして、世の中が、物質的にではなく

精神的な豊かさに溢れ、こうした子どもたちも、苦勞はするが全うな仕事に就けるようになればと強く望む。日本の伝統的な徒弟制度、職人の世界は、むしろこういう子どもたちにとっては分かりやすく、馴染みやすいものでもある。発展途上国とされていた国々がどんどん先進国の仲間入りをしている今、日本の伝統を守り、職人技を復活させていく良い機会ではないだろうか。後継者がいないと嘆いている職人も多々いると聞く。そこに、発達障がいの子どもの生きる道が一つあるのではと思う。

今回は、ゲームやネットについて書いてみようと思う。